

原田 昭一 提出 学位申請論文

『九州板碑考』 審査要旨

論文の内容の要旨

板碑は一観面の石に本尊としての梵字種子あるいは図像をあらわし、その下に造立年月日・願文・偈文などの銘文を記し、本尊は、時として名号・題目をはじめとしたその他の対象物を表すものである。その形態については、頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、しばしば額部や基部の両者か、あるいは額部のみを突出させる特徴を持つ整形板碑と、自然石を利用した自然石板碑の2形態が存在する。そして、出現以来、時代の変遷とともに、内容・形態とも変化を遂げ、本尊をもたないものや、形態についても、本来、整形板碑の特徴であった頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、額部や基部を突出させる形態の退化形態だけでなく、様々な形態が付加され、混沌としてくる。

本論文では九州における紀年銘をもつ整形板碑の実測図作成をもとにした資料化を前提とし、言うまでもなく遺漏があろうが、管見に触れる限り、筑前5例・筑後1例・肥前6例・豊前24例・豊後118例・肥後8例・日向57例・薩摩11例・大隅18例の板碑を紹介した。この資料数により九州各地における板碑の分布傾向がつかめる。資料数が10例に満たない筑前・筑後・肥前・肥後では、整形板碑が乏しい傾向にあり、反対に、豊前・豊後・日向・薩摩・大隅では整形板碑が隆盛をきわめたことがう

かがえるが、中でも 118 例を数える豊後が際立っている。この分布傾向は紀年銘をもたない資料に照らし合わせても同様な傾向を示すものと思える。この隆盛地の違いには、石材の存在が大きく起因しているものと考えられる。豊前・豊後・日向では良質な安山岩が、また、豊後・日向・薩摩・大隅では良質な凝灰岩が、それぞれ産出し、工人系譜のもと板碑製作が根付いていることがうかがえる。これに対し、筑前・筑後・肥前には凝灰岩・安山岩のような良質な石材が乏しく、また、肥後においては凝灰岩が豊富であるものの、自然石板碑の隆盛が整形板碑の流行の妨げになっている印象を受ける。

整形板碑のはじまりについては、紀年銘をもつ最古の資料として、正嘉 2 年（1258）銘の熊本県宇城市塔本家板碑があげられるが、弘安期（1278-1287）・正応期（1288-1292）に九州各地においてははじまりのピークを迎えることが確認できる。それは、地域や板碑の石材などを問わず、共通する。板碑に限らず、五輪塔をはじめとしたさまざまな石塔において、この時期に画期を迎え、また、工人系譜が先進的な各地に根付いていく時期である。しかも、そのはじまりはきわめて完成された様相をもち、鎌倉後期から南北朝期にひとつの隆盛期を迎える。

九州における板碑の出現期は全国的にみても、関東地方の武蔵型板碑に遅れるが、比較的、古式の板碑が確認できる南東北地方の動向に近い。この南東北地方の板碑も安山岩や凝灰岩を石材としており、初期の板碑の型式的な特徴を比較してもきわめてよく似ている。

整形板碑の型式を検討すると、ほとんどの属性において、板碑極少期

である 15 世紀前半に大きな画期が存在する。13 世紀の整形板碑出現以来、鎌倉期末～南北朝期を通じ、安山岩・凝灰岩を石材とする板碑すべてにおいて、定型化した型式をほとんど逸脱することなく製作され続けており、山型を三角形に上部に突出させ、山型下に断面三角形の二条切込みが近接して刻まれ、二条切込み下には突出した額部をもち、その下には梵字種子や像様等で仏菩薩をあらわし、それとともに銘文等を刻んだり墨書したりした碑身がある特徴をもつ。

これに対し、板碑極少期である 15 世紀前半の画期をはさみ、1470 年代以降にほとんどの属性において変化が生じ、形態が多様化および小型化するとともに資料数が激増することが確認できる。山型は三角形の頂部が前方に移行し、中には三角形が失われ、方形をはじめとしたその他の形態も出現する。また、山型直下の二条切込みは細くなり 2 条の陰刻線状に変化する傾向とともに間隔をあけて刻まれるようになり、この二条線が失われる資料すら出現する。額部の突出は低くなり、額部の突出すら表現されていない板碑もみられ、碑身部に見られる梵字種子も葉研彫りから小さく線刻状になる傾向があり、はては梵字種子すら刻まれなくなり、梵字種子にかわり円相や卍をはじめ多様な様相をもち始める。もちろん鎌倉・南北朝期に流行する型式をもつものもそのまま存在するが、かなり様相が異なり、復古調を意識したものかのようにも受け取れるものへと変化している。

この時期には、板碑碑身部の中に地藏像や位牌形が確認できるようになり、当時の冥界信仰の流行や、銘文に戒名や没年月日が刻まれている

ことからしても、板碑が墓碑的機能をもつようになったことがわかる。地蔵像を刻むことは近世墓碑まで受け継がれていくが、板碑造立の画期に伴い成立し流行する新たな要素の一つに数えられるし、墓碑的機能の出現はまさに近世墓碑の下地となるものであった。

また、板碑激減期以前にあたる南北朝期後葉に流行する結衆の塔婆は、交名をもつ特徴がみられ、現代も村のお堂など地域の信仰の対象となっている空間に造立されている特徴がある。南北朝後葉に始まった集村化に伴い、村人の紐帯を強める目的のもとに製作されたものと考えられ、室町期から戦国期に至り、宝篋印塔・宝塔から石幢（六地藏塔）にその主役の座を譲り、板碑自体が結衆の塔婆とされるのは比較的少ない。これに加えて、庚申信仰に伴う造立例が16世紀後半代以降に出現する。

このような変化は、板碑に限らず、五輪塔・宝篋印塔・宝塔すべての石造物がこの時期に変革期を迎えている。戦国期は石塔の墓碑化がひとつの大きな特徴と捉えられようが、これはその背景として、村落内の有力者に限定されはするものの、その資料数からして前代に比較すれば明らかな造立層の拡大化があり、それは集落景観や墓地景観にもあらわれるような社会的変化に起因するものである。

九州の板碑は整形板碑だけでなく、自然石板碑も数多くみられる特徴がある。本論文で集成を試みた板碑の資料数は筑前・筑後が96例、肥前が69例、肥後が354例、豊前が25例、豊後が9例、日向が20例、薩摩・大隅が5例といったように筑前・筑後・肥前・肥後・に圧倒的に多いことがわかる。これらの地域には、整形板碑が少なく、自然石板

碑と整形板碑が補完しあい分布する関係であることがうかがえ、整形板碑が隆盛する地域に自然石板碑が少なく、反対に自然石板碑が隆盛する地域には整形板碑が少ないことがわかる。各時代の造立についても、ほぼ、整形板碑と似た傾向を示す。ただ大きく異なるのは、整形板碑が鎌倉期中葉～後葉にはじまることに対し、自然石板碑は平安時代後期には出現していることである。以後、少数ながら造立をされ続け、整形板碑が流行しはじめる鎌倉期後葉に至り、自然石板碑も数を増やす傾向がある。このことから整形板碑出現以前から、仏菩薩を安置し、刻銘を施した石の塔婆の存在が求められたことが自然石板碑を通じて理解できる。また、その終焉についても整形板碑のように形態に表れにくい特徴をもつため、寛文期以降でも庚申塔などの民間信仰碑や墓碑等でごく普通にみられる。しかし近世の自然石板碑は墓碑として造立される場合、特に豊前から豊後にかけての山稜部をはじめ、修験の地や、在家信徒の墓地においても行者の墓と判断できるものに多い傾向があり、近世墓碑の中でも特殊な位置づけがなされていることは興味深い。

なお、近年の板碑研究において木製の塔婆との関連性が指摘されているが、11世紀後半以降の木製塔婆の中には明らかに板碑形をしているものがあり、今後の動向が注目されよう。豊後に例をとれば、軟質の凝灰岩を石材として石造物を製作することは平安時代後期にはじまり、石塔開始のピークである弘安期に石塔とは異なる木製あるいは金属製の塔婆をモデルにしたと考えられる石塔が複数基存在し、石塔のみで解釈できない要素もある。九州の石塔が比較的彫成しやすい軟質な凝灰岩や安

山岩を石材としていることから、木製の塔婆からの移行はスムーズに行われたであろうことが推測できる。

一方、板碑の終焉については、中世側からの視点では捉えにくい。板碑に限らず、中世石塔は戦国期から17世紀前半の慶長・元和・寛永期などに至っても何ら減少することなく、形態も戦国期からの型式変化を受け継ぐ。中でも、板碑よりもはるかに数が多い五輪塔が爆発的に流行する現象は全国的に確認できるが、九州では、寛文期を契機として、五輪塔・宝篋印塔・宝塔等、板碑以外の墓塔の機能をもつ石塔群は一斉に消えてしまう。整形板碑が生き残ったにしても、寛文期以降の板碑型墓碑とは形式的に異なるものがほとんどである。それとともに近世的な墓地景観に変化し、このような変化の背景には、当時、幕藩体制下で強力に推し進められた寺壇制度が強く影響したことが考えられる。これにより、中世的な石塔が否定され、整形板碑もその渦中に飲み込まれてしまったものと考えたい。

論文審査の結果の要旨

「板碑」とは、中世の石塔の一種で、これまでに知られているところでは関東地方に多く、石材を板状に加工してそれに梵字や像で天尊を示し、年次や造立趣旨などの銘文を刻んだものをいう。したがって、その銘文の読解を主として検討すれば、それは「石に刻まれた中世文書」の側面があり、いわゆる文献史学の研究対象であるが、石塔・石材等の面

を主として検討すれば、歴史考古学の研究対象だということになる。そうした板碑は、昭和初年までは、ほぼ江戸・東京を中心にその周辺地域で調査・研究がなされることが多かったが、服部清道の『板碑概説』刊行（昭和8年、1933）以後、日本列島の各地に石材を異にする板碑が存在することが広く知られるようになり、戦後には地方史研究の進展の中で、地域の中世を研究する上で貴重な史料だと次第に認識されるようになり、広汎に学問的な調査がなされるようになった。

さて、原田昭一の提出論文『九州板碑考』は、九州に残るその板碑を、忙しい仕事の合間を縫って、ほぼ独力で調査しきり、丹念な実測図の作成を積み重ねて「板碑の資料化」を図り、論文としてまとめた仕事である。九州にも板碑がたくさんあることは従来からよく知られており、県ごとの調査が行なわれたり、また、県によっては担当者が調査した成果を集積した報告書もなくはなかった。だが本論文は、論文提出者の原田が、大分県教育委員会に勤務するかたわら、休日を利用して九州全体の板碑を独自に調査し直し、いちいちの資料についてその実測図を作成して集積し、それらを資料として考察した論考である。本論文によって、九州の板碑の発生から終焉までの歴史と全体像、そしてその特質が、初めて明らかにされた成果であると言うことができ、この点に、本論文の第一の意義があると評価できる。

論文提出者は、九州の板碑を「整形板碑」（石材の形状が整えられた板碑）と「自然石板碑」（整形がなされていない石材に銘文等を刻んだ板碑）とに分け、とりわけ「整形板碑」に関する精細な分析を行い、形

態編年の基礎を固めている。些細なことのようにでありながら、実はこれによって紀年銘のない板碑の編年も可能になったといえ、また、この二種の板碑の分布から、「自然石板碑」が九州西北部に、一方、「整形板碑」が南部に多く分布することを具体的に明らかにし、石材とその加工技術との対応関係にも検討が及んでいる。この点も、この論文の成果の一つであるといえよう。そこから見えてくるものは、板碑の地域性の検討に、今後大きな意味を持つと考えられる。

さらに、九州の板碑が13～14世紀と15世紀後半～16世紀に二つの造立のピークがあることを指摘し、武蔵型板碑など他地域の板碑との共通性を明確にし、その背後に散村から集村への変化という社会構造の変容があったことを指摘する。また、第二のピークに出現する「墓碑化」の動きがやがて近世墓碑に帰着し、板碑が終焉を迎えること、しかもその過程には墓制の変化や檀家制度の成立などがあったとするなど、興味深い考察を行っている。もとより「墓碑化」の主張は、これまでに武蔵型板碑で行われてきたことではあるが、九州でもそのように考えることができることは興味深い。これらの指摘は、今後の板碑研究の中で、十分な検討がなされなければならない論点であるといえよう。

ただ、もとより、ほとんど独力でなした作業であるがゆえに、まだ改善、あるいは再検討すべき点もないわけではない。

たとえば、板碑の分布図が県ごとや幕末までの国単位の提示があるのみで、九州全域を包括する分布図が提示されていないのは、残念であっ

た。板碑の画期は広域で共通すると言うのであれば、そうした主張を論証する上でも、広域の分布図を提示することが欠かせないと考えられる。また、板碑の終焉を江戸時代の前期に想定する考え方は、関東の板碑研究者の多くからは、批判を受けるやもしれない。武蔵型板碑、青石塔婆などと呼ばれる、全国で一番多く板碑が造立された地域では、1600年前後にその終焉を迎えることは、残存する資料の上からも、ほぼ確定した考え方といってよかろう。その違いを、どう解明し論ずるか。申請者にとっては、今後の大きな課題となるに違いない。

しかし、そうした今後の課題は残るとしても、本論文が、九州全域において板碑を集成し、九州各地の板碑の変化や地域の特徴の把握につとめた研究であり、膨大な数の板碑を独力で調査しきり、その作業で九州地方の板碑が通観できるようになった点、さらに板碑の時期別の変化から終焉までの推移を把握し、提示したことをはじめ、本論文の学問的価値はきわめて高いと考えられよう。そして、本論文提出者の原田は、この検討の成果を踏まえて、板碑の調査・研究を一層押し進めることはもちろん、さらに板碑以外の九州に数多く残される中世石塔類の調査及び研究を深めていくという決意と覚悟を示しており、今後の研究の進展に大きな期待をもつことができる。

以上を総合的に判断すれば、論文提出者の原田昭一は、博士（歴史学）の学位を授与されるにふさわしいものとする。

平成 30 年 2 月 6 日

主査	國學院大學教授	千々和	到	⑩
副査	國學院大學教授	谷口康浩		⑩
副査	國學院大學准教授	青木敬		⑩
副査	大阪産業大學教授	市村高男		⑩

原田 昭一 学力確認の結果の要旨

下記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、
本大学院の博士課程において所定の単位を修得した者と同等以上の学
力を有することを確認した。

平成 30 年 2 月 6 日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	千々和	到	㊟
副査	國學院大學教授	谷口康浩		㊟
副査	國學院大學准教授	青木敬		㊟
副査	大阪産業大学教授	市村高男		㊟